

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「三国志物語」の形成：三顧茅廬故事を中心として
Author(s)	#谷, 聰
Citation	中國中世文學研究, 57 : 107 - 126
Issue Date	2010-03-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051423">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051423</a>
Right	
Relation	



## 「三国志物語」の形成

—三顧茅廬故事を中心として—

角 谷 聰

はじめに

三国時代の出来事にまつわる故事成語は数多く存在するが、中でもとりわけ広く人口に膾炙しているものの一つとして、「三顧の礼」が挙げられよう。目上の者が礼を尽くして賢人を招くことを意味するこの故事成語は、後に蜀の皇帝となる劉備が帝位に即く以前、荊州に寄寓していた折に、当時在野の賢人であった諸葛亮を自身の許に迎え入れようとして、彼の住まう草葺きの廬、即ち茅廬を三度訪問した、という故事に基づくものである。

この三顧茅廬の故事については、明代に成立した『三国志演義』（以下、『演義』と省略）の記述内容を思い浮かべる向きも多いのではないだろうか。三顧茅廬故事について、『演義』では概ね次のような展開となっている。

劉備は義弟の関羽と張飛を伴って初めて諸葛亮の茅廬を訪れるが、同日の朝に諸葛亮が出かけてしまったことを、召使いの少年から知らされる。二度目は真冬の訪問となり、降りしきる雪をおして再び三人

で茅廬を訪れるものの、やはり前日より遊山に出かけて不在のため面会が叶わない。年が改まり、三日間の齋戒沐浴を経て今一度訪れ、ようやく諸葛亮と念願の対面を果たす。

召使いの少年との会話や雪中の訪問など、極めて印象深い構成であると言えよう。こうした三顧茅廬の記述は、『三国志演義』に先立ち、元の至治年間（一三二一—一三二三）に成立した『三国志平話』（以下『平話』と省略）の中で、既にその骨格が形成されている。しかし、三顧茅廬故事は、その淵源の段階では極めて簡潔な記載しかなく、先に挙げた召使いの少年との会話や雪中の訪問などは一切見ることができない。

三顧茅廬故事の発生から、『平話』や『演義』の三顧茅廬故事の成立までには、千年以上の時間的な隔たりが存在し、その間に様々な形で存在していたであろう所謂「三国志物語」が、直接的、或いは間接的に影響を与えていることで、『平話』や『演義』の三顧茅廬故事が形成されるに至ったものと推測される。ただ、こうした空白の

期間における「三国志物語」の全貌を示す体系的なテキストは現在残されておらず、また、三顧茅廬故事の変遷過程についても先行研究では未だ十全に解明されているとは言い難い状況である。そこで、本稿では「三国志物語」の様相、とりわけ三顧茅廬故事の変遷過程について、主に唐・宋代の文献資料に基づきながら、その一端を明らかにしたいと考えている。

### 一、三顧茅廬故事の発生と継承

#### 1 三顧茅廬故事の淵源

『平話』や『演義』の成立にあたって、西晋の陳寿が著した正史『三国志』は、その中核をなす存在であると言えよう。そこで、まずは正史『三国志』の中から、三顧茅廬に関連する記述を確認することとしたい。蜀書「諸葛亮伝」に次のような記述が見られる。

時先主屯新野。徐庶見先主。先主器之。謂先主曰、「諸葛孔明者、臥龍也。將軍豈願見之乎。」先主曰、「君與俱來。」庶曰、「此人可就見、不可屈致也。將軍宜枉駕顧之。」由是先主遂詣亮、凡三往、乃見。

(時に先主新野に屯す。徐庶先主に見ゆ。先主之を器とす。先主に謂ひて曰く、「諸葛孔明は、臥龍なり。將軍豈に之に見ふを願ふか」と。先主曰く、「君与に俱に來たれ」と。庶曰く、「此の人就きて見ふべく、屈して致すべからざるなり。將軍宜し

く駕を枉げて之を顧みるべし」と。是に由りて先主遂に亮に詣り、凡そ三たび往き、乃ち見ふ。)

荊州の新野に駐屯していた劉備が、徐庶の紹介によって諸葛孔明の存在を知り、更に孔明は力づくで呼びよせるべき人物でないと言われたことを受けて、自ら三顧の礼に赴く、という場面である。引用部分の直後からは、諸葛孔明が劉備に対して天下三分の計を説く、所謂「隆中対」の場面が始まることから、三顧茅廬の経緯に関する記述は、「由是先主遂詣亮、凡三往、乃見。」の十数文字に過ぎないことが分かる。劉備が諸葛亮の許を三度訪れたことこそ確認できるものの、その詳細については一切窺い知ることができない。同じく、蜀書「諸葛亮伝」には、陳寿が「諸葛氏集目錄」を作成した際に奉った上奏文が掲載されており、

時左將軍劉備以亮有殊量、乃三顧亮於草廬之中。亮深謂備雄姿傑出、遂解帶寫誠、厚相結納。(時に左將軍劉備亮の殊量有るを以て、乃ち三たび亮を草廬の中に顧みる。亮深く備の雄姿傑出するを謂ひ、遂に帶を解き誠を書き、厚く相結納す。)

と記されている。やはりここからも、三度の訪問に関する具体的な記述は全く見出せない。他にも、諸葛亮自身が後主劉禪に奉った「出師の表」の中に、

臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、遂許先帝以驅馳。

(臣は本布衣にして、躬ら南陽に耕し、苟くも性命を乱世に全うし、開達を諸侯に求めず。先帝 臣の卑鄙たるを以てせず、猥りに自ら枉屈し、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに当世の事を以てす。是に由りて感激し、遂に先帝に許すに驅馳を以てす。)

との一文が見えるものの、やはり先の諸葛亮伝に記されていた以上の要素を読み取ることはできない。

この様に、三顧茅廬故事の原点とも言える正史『三国志』、並びに「出師の表」の段階において、三顧茅廬の記述は極めて簡潔なものに過ぎなかった。そこで引き続き、六朝・唐・宋の文献から三顧茅廬故事に関連する記述を抽出し、時代を追って見ることにしたい。

## 2 六朝期の三顧茅廬故事

六朝期の資料において、三顧茅廬故事に言及したものはあまり多く残されていないが、一例を挙げると、後秦の僧習等が記した「答案主書」に、

昔巢由抗節、堯許俱高。四皓匪降、上下同美。斯乃古今之一揆、百代之同風。且德非管仲、不足華軒堂阜、智非孔明、豈足三顧草廬。(昔巢由節を抗げ、堯許俱に高し。四皓降るに匪ず、上下同に美なり。斯れ乃ち古今の一揆にして、百代の同風なり。且つ徳は管仲に非ざれば、堂阜に華軒するに足らず、智は孔明に非ざれば、豈に三たび草廬を顧みるに足ら

んや。)

との記述が見られる。これは、後秦の第二代皇帝、高祖姚興(三九四〜四一五在位)が道恒、道標の二僧に對し、法衣を脱いで政治に参与するよう命じたことをめぐり、僧習、僧遷、鳩摩羅什の三僧が諫言を申し入れる文書の一部である。堯帝の時代の巢父や許由、また前漢初期の四皓などが皆、己の進むべき道を全うしたことを挙げた上で、道恒、道標の二人は孔明ほどの優れた知恵を有していないため、三顧の礼を尽くして召し出すには及ばない、と述べている。

六朝期の三顧茅廬故事に関する記述は極めて少なく、また、右に挙げた「答案主書」のように、その用法が典故表現に限定されていることから、三顧茅廬の具体的様相を示す新たな要素は、この時期に一切付加されなかったものと考えられる。

## 3 唐代の三顧茅廬故事

唐代になると、三顧茅廬を題材とする詩がしばしば詠ぜられるようになる。幾つか例を挙げると、咸通七(八六六)年の進士である晚唐詩人、汪遵の「南陽」において、

陸困泥蟠未適從

陸困なれば泥蟠して未だ適從せず

豈妨耕稼隱高蹤

豈に妨げん耕稼して高蹤を隠すを

若非先主垂三顧

若し先主の三顧を垂るるに非ずんば

誰識茅廬一臥龍

誰か識らん茅廬の一臥龍

と見える。先主劉備が三顧の礼を尽くさなければ、茅廬に住む臥龍、即ち諸葛孔明の存在をいつたい誰が知り得たであろうか、と詠われている。詩題の「南陽」とは、荊州北部の地名で、孔明はここに廬を構えていたと伝えられている。また、同じく咸通年間に科挙を受験した李山甫の詩、「代孔明哭先主」では、

憶昔南陽顧草廬

昔南陽に草廬を顧みるを憶ふ

便乘雷電捧乘輿

便ち雷電に乘じ乘輿を捧ぐ

と、李山甫が孔明の心情を代弁するという設定のもと、劉備がかつて草廬を訪ねて来たことを思い出す、という形で三顧茅廬の逸話が取り込まれている。更に、やはり咸通年間に科挙試験に臨んだ胡曾の詠史詩「南陽」にも、三顧茅廬故事が見られる。

世亂英雄百戰餘

世乱れて英雄百戦余

孔明方此樂耕鋤

孔明此に方りて耕鋤を楽しむ

蜀王不自垂三顧

蜀王自ら三顧を垂れずんば

爭得先生出舊廬

争か得ん先生の旧廬を出づるを

後に蜀王となる劉備が三顧の礼を尽くさなければ、どうして孔明は茅廬を出ることがあつたであろうか、と先に挙げた汪遵の「南陽」同様、仮説の中に三顧茅廬故事を組み込んでいる。

この様に、唐代、とりわけ晩唐の頃になると詠史詩の隆盛に伴い、三顧茅廬故事が往々にして詩中に詠み込まれるようになる。ただ、唐代の資料においても数的な増加こそ見られるものの、三顧茅廬故事そのものの質的な変化については、やはり見ることができなかった。

#### 4 宋代の三顧茅廬故事

宋代に入った後も、北宋から南宋にかけて幅広く三顧茅廬故事を詠み込んだ詩が見られる。蘇軾の「与周長官李秀才遊徑山二君先以詩見寄次其韻二首」<sup>13</sup>は、当時錢塘県の長官であつた周邠と、やはり錢塘にいた友人の李行中から寄せられた詩に対する次韻詩で、「其二」に次の二句が見える。

孔明不自愛

孔明自ら愛せず

臨老起三顧

老に臨みて三顧に起つ

この詩によると、孔明は我が身を惜しむことなく、老齡に差しかかりながらも三顧の礼に報いるべく立ち上がったこととなる。一方、清朝考証学者の何焯はこの詩に対して、

孔明始從昭烈、年二十七耳。何謂臨老。(孔明始めて昭烈に従ふに、年二十七なるのみ。何ぞ老に臨むと謂はん。)

との指摘を行っている<sup>13</sup>。劉備が三顧の礼に赴いた当時、孔明が二十七歳であつたことは、正史『三国志』の記述と合致する一方で、蘇軾が孔明の年齢を誤認していたと

も考え難く、本詩の解釈は若干の疑義を残すものである。しかし、孔明が三顧の礼を受けて出仕した、という基本部分は従来の内容を踏襲するものと言えよう。同じく北宋の黄庭堅が詠じた「詠史呈徐仲車」<sup>14</sup>は、詠史詩の形式で友人の徐積に贈った詩であり、そこに、

諸葛見益州 諸葛益州に見え

釋未答三顧 未を釈して三顧に答ふ

と詠まれている。詩中の「益州」とは、益州の牧の地位にあった劉備を指しており、劉備と面会した諸葛孔明は、農具を打ち棄てて三顧の礼に報いた、とある。南宋に入ってから、陸游が諸葛孔明の読書台を訪れた際に詠んだ詩、「遊諸葛武侯書台」<sup>15</sup>において、

松風想像梁甫吟 松風想像す梁甫の吟

尚憶幡然答三顧 尚憶ふ幡然として三顧に答ふる

と詠じている。松林を渡る風の音に、その昔孔明が好んで口ずさんでいたとされる梁甫吟を想起し、また、態度を翻して三顧の礼に報いた姿が懐古される、といった内容である。

以上、六朝から唐・宋にかけて、三顧茅廬故事を題材とする詩文を見てきたが、劉備が諸葛孔明の茅廬を三度訪れ、孔明がこれに報いるべく出廬を決意した、という基本要素以外に、その詳細を伺わせる記述は何一つ見出すことができなかった。これは言い換えると、六朝から宋代に至るまでの間、『三国志』諸葛亮伝や「出師の表」

に見ることのできない、新たな三顧茅廬故事が殆ど形成されてこなかった、という状況を示しているに等しい。そして、こうした状況は、『平話』や『演義』に見られる小説としての三顧茅廬の件が、歴代の三顧茅廬故事そのものの単純な変化や発展を受けて構築されたものであるという可能性の極めて低いことを物語っている。そこで、次節では三顧茅廬が行われる以前、即ち劉備に未だ仕えていなかった頃の諸葛孔明が、どのような存在として認識されていたのかに焦点を当てて、考察を進めることとする。

## 二、三顧茅廬以前の諸葛亮像

諸葛亮が三顧の礼を未だ受けることなく、在野の賢人として過ごしていた時期をめぐって、北宋初期の王欽若等の撰になる『冊府元龜』<sup>16</sup>には次のような記述が見られる。

諸葛亮、字孔明、隱居南陽時、先主初屯新野。徐庶謂之曰、「諸葛亮孔明者臥龍也。將軍豈願見之乎。」

先主曰、「君與俱來。」庶曰、「此人可就見、不可屈致也。將軍宜枉駕顧之。」繇是先主詣亮、凡三往、

乃見。（諸葛亮、字は孔明、南陽に隱居せし時、先主初めて新野に屯す。徐庶之に謂ひて曰く、「諸

葛亮孔明は臥龍なり。將軍豈に之に見ふを願ふか」と。先主曰く、「君与に俱に來たれ」と。庶曰く、

「此の人就きて見ふべく、屈して致すべからざるなり。將軍宜しく駕を枉げて之を顧みるべし」と。是に繚りて先主亮に詣り、凡そ三たび往きて、乃ち見ふ。」

この一節が、本稿の冒頭に掲げた『三国志』諸葛亮伝における三顧茅廬の記述をほぼそのまま引き写していることは指摘するまでもない。そうした中で注目すべきは、「隱居」の二字である。『冊府元龜』に拠れば、三顧の札を受ける以前の孔明は、隱居状態にあつたこととなる。同様の記述は、やはり類書である『白孔六帖』の中にも見ることが出来る。

諸葛亮隱居。人謂蜀先主曰、「諸葛孔明臥龍也。」（諸葛亮 隱居す。人蜀の先主に謂ひて曰く、「諸葛孔明は臥龍なり」と。）

ここでも、諸葛亮を指して「隱居」の二字が用いられている。他に、南宋の淳熙年間（一一七四—一一八九）に成立した禅宗の經典である『禅林宝訓』にも、以下のような話が収められている。

眞淨文和尚久參黃龍。初有不出人前之言、後受洞山請。道過西山、訪香城順和尚。順戲之曰、「諸葛昔年稱隱者、茅廬堅請出山來。松華若也沾春力、根在深岩也著開。」眞淨謝而退。（眞淨文和尚久しく黃龍に參ず。初め人前に出でざるの言有り、後に洞山の請を受く。道西山を過ぎ、香城順和尚を訪ぬ。順之に戯れて曰く、「諸葛昔年 隱者と稱するも、

茅廬に堅く請へば山を出で来たれり。松華の若きも也春力に沾ひ、根の深岩に在るも也著き開く」と。眞淨謝して退く。）

臨濟宗の僧である眞淨文和尚は、当初修行に専念して世に出ないと宣言していたにも関わらず、後に洞山寺からの招請に応じることとなる。洞山寺に向かう道中、兄弟子の香城順和尚を訪ねた折に、「諸葛亮はその昔、隱者と自称していたが、茅廬にて強く招請されたことから出廬に至つた」とのことばを戯れに投げかけられる、といった内容である。このように、三顧の札を受ける以前の諸葛亮を指して隱者と認識する記述が、宋代以降の文獻中に複数見られる。

また、同じく宋代の詩や詞の中からは、諸葛孔明と陶淵明のイメージを重ね合わせる表現も幾つか見られる。陶淵明は、その後半生において役人生活を放棄し、悠々自適の暮らしを送つたことで知られており、鍾嶸から「古今隱逸詩人之宗也」と称されるなど、六朝梁の時代には既に隱者の典型と目されてきた人物である。この陶淵明と諸葛孔明を結びつける資料は、北宋の頃から次第に見られるようになる。黃庭堅の「宿旧彭沢懷陶令」では、

歲晚以字行 歲晚 字を以て行はれ

更始號元亮 更始して 元亮と号す

凄其望諸葛 凄其として 諸葛を望み

骯髒猶漢相 骯髒たること 猶ほ漢相のごとし

と詠じられている。彭沢県に宿つて陶淵明を懷古する詩

の中で、晩年、淵明という<sup>あざな</sup>字で広く知られていたにも関わらず、これを改めて元亮と名乗った、それは悲愴な思いで諸葛孔明を慕うが故であり、陶淵明の剛直な姿はさながら蜀漢の丞相、諸葛亮のようである、と詠まれている。陶淵明の名と字をめぐっては、名が潜、字が淵明であるとする説や、名を淵明、字を元亮とする説など、種々の見解が早くから存在しており、ここで俄に確定することはできない。ただ、黄庭堅は本詩において、陶淵明が諸葛孔明を思慕するあまり、自身の字を孔明の名である亮に借りて元亮と改めた、と認識していたようである。他に、黄庭堅の詩の中には、以下のような資料も存在する。「題伯時画松下淵明」の中に、

終風霾八表 終風八表に霾り

半夜失前山 半夜前山を失す

との二句が見られる。北宋を代表する画家の一人、李公麟（字は伯時）が描いた「松下の淵明」に寄せる詩の中で、『毛詩』邶風の「終風」を典故とするこの二句自体、諸葛孔明とは何ら関わるものではないが、この部分に附された宋人の注に次のような記述が見える。

蜀中舊本元作「平生夢管葛、采菊見南山。」言淵明初名元亮、本慕諸葛孔明、有當世志。晩年恥屈身異代、始自放於山林也。（蜀中旧本元「平生 管葛を夢み、菊を採りて南山を見る」に作る。言ふところは淵明初めの名は元亮、本諸葛孔明を慕ひ、当世の志有り。晩年 身を異代に屈するを恥ぢ、始めて自

ら山林に放つなり。）

この記述に拠れば、蜀に伝わる古いテキストでは元来、陶淵明が平素より管仲と諸葛亮を敬慕し、出仕の志を抱いていた旨の二句であったこととなる。このように、黄庭堅の二首の詩からは、王佐の才を遺憾なく發揮した蜀の丞相、諸葛孔明に対して、百五十年近く後に生まれた陶淵明が強い羨望の念を抱いていた、という認識の現れを見て取ることができる。更に、南宋に入ると、孔明と陶淵明を同列の存在として扱う資料も見られるようになる。辛棄疾の詞、「賀新郎」には、

把酒長亭説。看淵明風流酷似、臥龍諸葛。（酒を把り長亭に説く。淵明を見るに風流 酷だ似たり、臥龍諸葛。）

と詠じられている。辛棄疾が前日まで共に過ごしていた友人の陳亮に宛てて詠んだこの詞において、宿場で陳亮と別れの杯を交わした際に、淵明の風流な様子は諸葛孔明に酷似している、と語り合つたことが読み込まれている。陶淵明は一説によると字が元亮であり、諸葛孔明の名は言うまでもなく亮であることから、この両者を取り挙げることで、やはり亮を名とする陳亮に対しても、その風雅な様子を称える意図が辛棄疾にはあつたものと考えられるが、何れにせよ、ここで諸葛孔明と陶淵明が共に風流な人物として並称されていることは注目に値する。辛棄疾はまた、「玉蝴蝶」の中でも、

農家、生涯蠟屐。功名破甌、交友搏沙。往日曾論、



淵明似勝臥龍些。(儂家、生涯 屐に蟻す。功名は破甑のごとく、交友は沙を搏むがごとし。往日曾て論ぜり、淵明 臥龍に勝るに似たり、と。)

と詠じている。下駄に蠟を塗って過ぎした東晋の阮孚の如き気ままな生活にあこがれ、功名も友人も頼むに足らぬ存在であると詠った上で、陶淵明の方が諸葛孔明より優れた存在であろう、と辛棄疾自身の思いを述べている。

この詞における諸葛孔明と陶淵明の關係は、直前の内容を踏まえるならば、隱逸生活を接点とする対比であろうと考えられる。四十一歳で職を辞し、以来晩年に至るまで隱逸生活を貫き続けた陶淵明の方が、二十七歳で三顧の礼を受けて隱逸生活から離脱した孔明よりも優れている、と辛棄疾は評価していたようである。他に、南宋末の謝枋得が詠じた詩、「菊」<sup>27</sup>においても、

淵明豈但隱逸人

淵明 豈に但だ隱逸の人なるのみならずや

淵明素懷諸葛志

淵明 素より懷く諸葛の志

と、陶淵明が隱逸生活を送りながらも、諸葛孔明の如く世のために尽くしたいとの志を抱いていた様子が詠じられており、ここでもやはり諸葛孔明と陶淵明の併記、並びに隱逸の要素を共通して見ることが出来る。

以上、三顧茅廬を受けて出仕する以前の諸葛亮像に着目して、宋代の資料を中心に見てきた。そこからは、不世出の宰相として後世に至るまで揺るぎない地位を獲得した諸葛孔明に対して、一方で隱者としての形象が付与

され、更には六朝期を代表する隱逸詩人である陶淵明との対比や同化が図られるといった様相を明らかにすることができた。なお、諸葛孔明と陶淵明が結びつけられるに至った理由としては、両者の隱逸時期における住まいが廬であった、という共通点も少なからず影響しているものと考えられる。<sup>28</sup>宋代以降、隱者という新たな人物形象を確立した諸葛孔明であるが、次節では更に隱者を手がかりとして、『平話』や『演義』へと繋がる三顧茅廬故事の形成過程を探ることとしたい。

### 三、「尋隱者不遇」詩と三顧茅廬故事

隱者を題材とする詩は、古来より数多く詠じられており、そうした中で唐代に入ると、「尋隱者不遇」詩と称される一連の作品が多数見られるようになる。西晋の左思に代表される「招隱詩」の系譜を引くこれらの詩について、石川忠久氏は、「はるばる隱者を尋ねて来たが、当の隱者は姿を見せないところに、かえって隱者の風趣がかもし出されるのである。逆説的というか、一ひねりした味わいをねらう、中国の詩独特の世界の一つである。」<sup>29</sup>とまとめられている。こうした「尋隱者不遇」詩の中でも、比較的初期のものとして、盛唐の丘為が詠じた「尋西山隱者不遇」<sup>30</sup>には、次のような表現が見られる。

絶頂一茅茨 絶頂の一茅茨

直上三十里 直ちに上る 三十里

扣關無僮僕 関を叩くも 僮僕無く

窺室唯案几 室を窺へば 唯だ案几のみ

山頂の茅葺きの廬に向かつて真つ直ぐ三十里ほど登り、扉を叩いたが僮僕はおらず、室内を覗くとただ机があるばかり、といった内容である。この詩において、隠者の住まいが茅葺きの廬となっている点に、三顧茅廬故事との共通性が見出せることは言うまでもない。そして、三句目に「無僮僕」とあることから、隠者の住まいに付随する要素として、召使いの存在を指摘することができ。この召使いに關しては、中唐の賈島が詠じた「尋隱者不遇」<sup>32</sup>にも、

松下問童子 松下 童子に問へば

言師采藥去 言ふ 師は藥を採らんとして去ると見える。この詩からは、童子、即ち召使いの少年に対して隠者の所在を訊ねる、といった様子を読み取ることができる。そして、こうした「尋隱者不遇」詩にしばしば詠み込まれる召使いの少年は、『演義』の三顧茅廬故事の中でも重要な役割を担う存在として登場しており、現存する最も古い版本である嘉靖壬午本『三国志通俗演義』第八卷「劉玄德三顧茅廬」<sup>32</sup>に、次のように記されている。

玄德來到莊前下馬、親扣柴門。一童出問。……玄德曰、「新野劉備來訪。」童子曰、「今早少出。」玄德曰、「何處去了。」童子曰、「踪跡不定、不知何處去了。」玄德曰、「幾時歸。」童子曰、「不准。或三五

日、或十數日。」玄德惆悵不已。（玄德は屋敷の前に至ると馬を下り、自ら柴の戸を叩いた。一人の童子が出て来て尋ねた。……玄德、「新野の劉備が参りました。」童子、「先生は今朝出かけました。」玄德、「どちらへ出かけられたのか。」童子、「行く先は定かではありません。どこに行つたのか分かりません。」玄德、「いつお帰りになるか。」童子、「はつきりしません。四、五日後かも知れないし、十数日後かも知れません。」玄德はたいそうがっかりした。）

これは、劉備が初めて諸葛孔明の廬を訪ねた際の描写であり、劉備が柴の戸を叩くと一人の童子が出てくる、更にとりが見られる。この様に、隠者の住まいに童子が同居している点、そして童子に対して隠者の行方を訊ねるといった構造は、先に挙げた丘為や賈島の詩、とりわけ賈島詩との高い共通性を見ることができよう。

唐代に詠まれた「尋隱者不遇」詩には、童子以外にも様々な要素が見られる。中唐の詩人、王建の「尋李山人不遇」<sup>33</sup>には、

山客長須少在時 山客 長く須からく在る時少な

溪中放鶴洞中棋 溪中 長く須からく在る時少な  
く 洞中に鶴を放ち 洞中に棋すべし

との二句が見える。詩題の李山人とは、当時嵩山に隱棲

していた李渤を指し、彼は殆ど自身の住まいに留まることがなく、谷川で鶴を放したり、洞穴の中で碁を楽しんだりしていることであろう、と詠まれている。李山人の住み処が茅葺きの廬かどうかは本詩に明示されていないものの、居処を不在にしている隠者が洞穴の中で碁を楽しむ、といった様子を窺い知ることができる。また、王建より二十五歳年下の詩人、許渾は「与張道士同訪李隱居不遇」の中で、

千巖萬壑獨携琴 千巖 万壑 独り琴を携ふ  
知在陵陽不可尋 陵陽に在るを知るも 尋ぬべからず

と詠じている。詩題の張道士や李某については未詳であるが、隠者の李某を訪ねたところ彼は不在で、幾千万の岩山や溪谷の中に琴を携えて入ってしまったようであり、陵陽山にいと知りつつも、その行方を尋ねる術がない、と詠まれている。この詩の中では、遇うことのできない隠者に対して、琴を携えて出かける、といった表現がなされている。そして、これらの洞穴の中で碁を打つ、或いは琴を携えて出かける、といった外出中の隠者像についても、やはり『演義』の三顧茅廬故事に見ることが出来る。第八巻「玄徳風雪訪孔明」に次のように記されている。

玄徳曰、「二人何處閑遊。」均曰、「或駕小舟、遊於江湖之中、或訪僧道於山嶺之上、或尋朋友於村僻之中、或樂琴棋於洞府之内。往來莫測、不知去所。」

（玄徳、「お二人はどちらへ行かれたのでしょうか。」諸葛均、「小舟に乗って水辺で遊んでいるかも知れませんし、僧侶や道士を訪ねて山に登っているかも知れませんが、村里に友人を訪ねているかも知れませんし、ほら穴の中で琴や碁を楽しんでいるのかも知れません。何をしているか予想もつかず、どこに行っているのかも分かりません。」）

劉備が二度目の訪問を行ったところ、孔明が友人の崔州平と二人で出かけてしまったことを知り、その行方を訊ねるといった場面で、諸葛亮の弟にあたる諸葛均が、洞穴の中で琴や碁を楽しんでいるのかも知れない、と答えている。洞穴の中で琴や碁を楽しむ様子は、古来より隠者の典型的な行為として極めて一般的なものとも言えるが、そうした行為が唐代の「尋隠者不遇」詩の中にも取り込まれ、更には『演義』の三顧茅廬故事にまで継承されている点は、非常に興味深い現象であると言えよう。引き続き、盛唐の詩人、岑参が詠じた「草堂村尋羅生不遇」を見ることとしたい。

門前雪滿無人跡 門前 雪滿ち 人跡無し  
應是先生出未歸 応に是れ先生出でて未だ帰らざ

るべし

詩題の羅生については不明であるが、恐らくは隠者であろうと推測される。彼の住まいを訪ねてみたものの、門前に雪が降り積もっていて足跡がないという状況から、羅生が未だ帰宅していないことを暗示する表現がなされ

ている。「尋隠者不遇」詩の舞台設定として、雪を用いるという手法がこの詩から確認できよう。また、時代は少し下るが、南宋の陸游が詠じた「訪客不遇」<sup>26</sup>には、

風急斜吹帽　風急に斜めに帽を吹き  
泥深亂濺衣　泥深く乱りに衣に濺ぐ

との二句が見られる。この詩では、客子を尋ねる道中について、激しい風が帽子に吹きつけ、また泥濘が深いため衣服に泥がかかってしまふ、と幾多の困難に行く手を阻まれる様子が、極めて具体的に表現されている。そして、こうした舞台設定としての雪や、訪問途中の困難な様子について、『演義』の第八卷「玄徳風雪訪孔明」には次のような記述が見られる。

建安十二年、冬十二月中、天氣嚴寒、彤雲密布。玄徳同關張、引十數人、前赴隆中、求訪孔明。行不數里、忽然朔風凜凜、瑞雪霏霏、山如玉簇、林似銀粧。

……玄徳曰、「吾正欲教孔明見吾懇懃之意。如兄弟怕冷、汝可先回。」（建安十二年、冬十二月、寒さ厳しく、雪雲が一面を覆っている。玄徳は関羽、張飛と共に、十數人を従えて隆中に赴き、孔明を訪ねようとしている。数里も行かないうちに、突然北風がびゅうびゅう吹き付け、雪がちらちら舞い、山は白玉が集まったかのように、林は銀の化粧をしたかのようにになった。……玄徳は言った、「私は孔明殿に誠意を示そうとしているのだ。おまえは寒いのが嫌なら、先に帰るが良い。」）

冬の十二月に劉備が二度目の訪問を行う場面で、数里も行かないうちに北風が吹き荒び、雪が舞い始め、同行していた義弟の張飛が引き返そうと言うのに対して劉備は、雪の中を訪ねることで孔明に誠意を示すのだ、と答えている。『演義』における三顧茅廬故事の中でもとりわけ印象的な場面であり、折からの吹雪は劉備一行の訪問を苦難に満ちたものへと変質させると同時に、諸葛孔明が大層得難い存在であることを読者に印象づける役割をも担っていると言えよう。孔明の廬を訪ねた際に雪が舞っていた、という記述が、正史『三国志』や諸葛亮の「出師の表」はもとより、三顧茅廬を題材とする歴代の詩の中にも一切見られなかったことは、本稿で既に確認した通りである。また、『三国志平話』における三顧茅廬の記述を見ても、雪の降る様子は全く記されていないことから、二度目の訪問における雪の描写は、『三国志演義』の段階に至って初めて形成されたものと見なし得よう。ただ、『演義』における雪の描写が、全くの無から生じたものであるかと言えばそうではなく、岑参の「草堂村尋羅生不遇」に見られた隠者の不在を暗示する雪の用法や、陸游の「訪客不遇」に見られた訪問途中の困難な様子などが、『演義』の三顧茅廬故事形成過程においては、何らかの影響を与えた可能性も充分に考えられるのではないだろうか。

また、中唐の詩人、竇鞏の「尋道者所隠不遇」<sup>27</sup>には次のような二句が見られる。

欲題名字知相訪

名字を題して相訪ぬるを知らしめんと欲するも

又恐芭蕉不奈秋

又恐る 芭蕉の秋に奈へざるを

遇うことのできない隠者に対して自らの訪問を知らせるため、芭蕉の葉に名前を書き付けようとするもの、秋になって葉が枯れることを心配する、といった内容の詩である。ここからは、遇えない隠者に対して訪問の形跡を示すための書き付けを残す、という発想が見て取れる。同様の発想は、晩唐の杜荀鶴が詠じた「訪道者不遇」にも見ることができよう。

題詩留姓字

詩を題して姓字を留め

他日此相親

他日此に相親しまん

この詩においても、やはり詩を書き付けて自身の氏名を相手のもとに残した、とする内容が詠われている。そして、訪問者が自身の名前や詩を書き残す、という行為については、『三國志演義』に先立つ『三國志平話』の三顧茅廬の場面に既に見ることができよう。巻中に次のように記されている。

道童出庵、對皇叔言、「俺師父從昨日去江下、有八俊飲會去也。」皇叔不言、自思不得見此人。便令人

磨得墨濃、於西牆上寫詩一首。詩曰、……。(童子が庵から出て来て劉皇叔に言った、「お師匠様は昨日、江下に行きました。八俊の宴会に行つたのです」と。劉皇叔は何も言わず、彼に会う事はできないであらう、と心の中で思った。そこで墨を濃くすらす

ると、西の壁に詩を一首したためた。その詩とは、……)

一度目の訪問にあたって、諸葛孔明に遇うことができなれど知った劉備は、先に挙げた杜荀鶴の「訪道者不遇」と同様に、訪問の形跡を示すための詩を書き残している。そして、『演義』においても第八卷「玄德風雪訪孔明」の中に、やはり類似する描写を見ることができよう。

均曰、「家兄不在、不敢久留車騎。容日却來回禮。」玄德曰、「豈敢望先生枉駕來臨。數日之後、備當又至矣。願借紙筆、留一書、上達令兄、以表劉備懇懇之意也。」均遂具文房四寶。玄德開凍筆、拂展雲箋。其書曰、……。(諸葛均、「兄がいない以上、長く足止めは致しません。日を改めて返礼に伺います。」玄德、「どうして先生にわざわざお越し頂くに及びましようか。数日後に、私が必ずまた参ります。どうか紙と筆をお貸しください。一筆書き置きをしてお兄様にお伝えし、私の誠意を示そうと思います。」諸葛均が文房四宝を持つてきた。玄德は凍った筆に息を吐きかけ、さっと便箋を広げた。その手紙とは、……)

ここでは、杜荀鶴の詩や『平話』の描写と異なり、手紙を書き残すこととなっているが、書き置きを残している点に相違はない。この様に、不在の隠者に対して詩や手紙を書き残す、という『平話』・『演義』の三顧茅廬故事に均しく見られる描写についても、やはり寶鞏や杜荀

鶴が詠じた「尋隠者不遇」を主題とする詩の影響を受けている可能性があるものと考えられる。

「尋隠者不遇」詩として最後に、韋応物が詠じた「休假日訪王侍御不遇」を取り上げることとしたい。

九日驅馳一日閑 九日驅馳して一日閑なり

尋君不遇又空還 君を尋ねて遇はず 又空しく還る

九日間あくせく働き、一日暇な時間ができたのであなたを訪ねたが、遇うことができずに空しく帰途に就く、といった内容の詩である。一連の「尋隠者不遇」詩は、隠者と遇えないことを大前提とする作品群であり、従って本詩に見られる、「尋君不遇又空還」という一句は、「尋隠者不遇」詩の核心を突く表現であると言えよう。そして、この韋応物の一句に極めて類似する表現が、後世の三顧茅廬故事の中にも散見されるのである。『平話』の巻中には、次のような詩が収められている。

獨跨青鸞何處遊 独り青鸞に跨り 何処にか遊ぶ

多應仙子會瀛洲 多く応に仙子 瀛洲に会すべし

尋君不見空歸去 君を尋ねて見はず 空しく帰る

去る

野草閑花滿地愁 野草 閑花 地に満ちて愁ふ

この七言絶句は、先に書き付けの存在について言及する際に引用した、「便令人磨得墨濃、於西牆上写詩一首。」

という記述に続くものであり、劉備が西の壁にしたためた詩が、右の絶句となっている。その三句目に、「尋君

不見空歸去」とあり、字句に多少の差異は見られるものの、韋応物の詩と非常に近い句作りになっていることは明らかであろう。他に、『平話』と同じく元の時代に成立した無名氏の戯曲、「諸葛亮博望燒屯」の第一折においても、ほぼ同様の表現を見ることができる。

則今日直至臥龍岡訪孔明、走一遭去。獨跨蒼鸞何處遊、神仙多管赴瀛洲。訪君不遇空回首、若的那野草閑花滿地愁。(さて本日は臥龍岡に孔明殿をお訪ねし、一目お会いするとしよう。一人青い鸞に跨って一体どこで遊んでおられるやら、仙人は恐らく瀛州にでも行っているのだろう。あなたを訪ねるも遇う事叶わず空しく引き返し、かの野草や野花は愁いに満ちる事になる。)

これは、劉備が三度目の訪問を行う場面に相当し、その後半部分には、一部字数の揃わない箇所があるものの、先の『平話』とほぼ同じ形の絶句が収められている。そして、三句目の「訪君不遇空回首」という表現からは、やはり韋応物詩との共通性が伺えよう。一方、『演義』の中で該当する表現を確認すると、版本間に少なからざる異同の見られることが明らかとなった。はじめに、これまでと同じく嘉靖壬午本『三国志通俗演義』第八卷「玄德風雪訪孔明」に拠って該当箇所を確認すると、次のように記されている。

正值風雪滿天、回望臥龍崗、悒悒不已。後人有詩、單道風雪訪孔明。其詩曰、一天風雪訪賢良、不遇空

回意感傷。……。又詩曰、見説南陽隱士賢、相邀不見又空還。……。(折しも空一面の吹雪となり、臥龍岡を振り返つては気がふさぐ。後代の人に詩があり、劉備が吹雪の中、孔明を訪ねた事を詠じている。その詩とは、一天の風雪に賢良を訪ね、遇わずして空しく回り意感傷す。……。もう一首の詩は、見説く南陽の隱士賢なりと、相邀えて見わず又空しく還る。……。)

二度目の訪問を行うも、孔明に遇えなかつた劉備一行が、諸葛均にいとまを告げて帰る途中の描写であり、二首の詩が引用されている。一首目の詩においては、「訪賢良」や「不遇空回」といった表現が、「尋隠者不遇」詩との関わりを感じさせるものとなっている。そして、二首目の詩に見られる「相邀不見又空還」の一句が、韋応物詩、並びに『平話』や戯曲の表現に類似するものであることは、容易に見て取れよう。しかし、韋応物詩や『平話』、戯曲の表現では一貫して「尋(訪)君不遇(見)」となつており、嘉靖壬午本における「相邀不見」とは多少の隔たりが感じられる。嘉靖壬午本では、動詞を「邀」とすることによつて、単純に孔明に遇うばかりでなく、孔明を自軍に迎え入れようとする劉備の強い願望が投影された形になっているものと考えられる。それは、嘉靖壬午本の句作りが、三顧茅廬故事に特化されることによつて生じた、『平話』や戯曲に比べて一段階発展した表現になっているものとも言えよう。一方で、『演義』の各

版本間において、当該部分の字句が些か異なっていることは先述の通りである。ここでは、二首目の詩、即ち嘉靖壬午本が「見説南陽隱士賢、相邀不見又空還。」と表現する部分のみに対象を絞つて、版本の系統ごとに異同を検証することとした。はじめに、嘉靖壬午本と同じく二十四卷本系統に属する周日校本、夏振宇本、並びに李卓吾評本を見ると、次のようになっている。

見説南陽隱士賢

見説く南陽の隱士賢なりと

相隨不見又空還

相隨ひて見はず又空しく還る

二十四卷本系統の三種は、嘉靖壬午本が「相邀」としていた部分を「相隨」に作っている。ここでの「隨」は、追い求める、追求する、といった意味で用いられているものと考えられ、嘉靖壬午本同様、単純に孔明に遇おうとする以上の意図を含む表現と言えよう。次に、二十卷繁本系テキストによつて該当箇所を見ることがする。現存する中では嘉靖壬午本に次いで古い版本となる葉逢春本、更に余象斗本、志伝評林本では、何れも共通して以下のような表記となっている。

見説南陽賢士隱

見説く南陽に賢士隱ると

相尋不遇又空還

相尋ねて遇はず又空しく還る

一句目の「賢士隱」の語順が、二十四卷本系統と異なっている点はひとまず措くとして、注目すべきは二句目の表現である。「相尋不遇」における「尋」と「遇」が二十四卷本系統との決定的な相違点であり、そして韋応物詩との浅からぬ関係性を示唆するものとなっている。二

十卷繁本系テキストでは他に、鄭少垣本(48)と楊閩齋本(49)が何れも、

見説南陽隱士賢 見説いふまゝく南陽の隱士賢なりと

相尋不遇又空還 相尋ねて遇はず 又空しく還る

と表記している。一句目の表記は二十四卷本系諸本と一致するものの、二句目の表記は二十卷繁本系諸本の間で共通する結果となっている。更に、二十卷簡本系テキストについても該当部分の調査を行ったところ、劉龍田本(50)が葉逢春本、及び余象斗本、志伝評林本と同じく、

見説南陽賢士隱 見説いふまゝく南陽に賢士隱ると

相尋不遇又空還 相尋ねて遇はず 又空しく還る

に作っており、また劉榮吾本(51)は鄭少垣本、楊閩齋本に等しく、

見説南陽隱士賢 見説いふまゝく南陽の隱士賢なりと

相尋不遇又空還 相尋ねて遇はず 又空しく還る

と表記されていた。一句目を「賢士隱」とするか、「隱士賢」とするかの違いはあるものの、二句目の表現に関しては二十卷本全体を通して完全に一致する結果となった。<sup>52</sup>

以上、『三國志演義』の三顧茅廬故事に付帯する詩をめぐって、韋応物が詠じた「休假日訪王侍御不遇」との比較を行った結果、志伝本、或いは福建本とも称される二十卷本系諸本の方が、より韋応物詩に近い表現となっていることが明らかとなった。『演義』の版本をめぐっては、嘉靖壬午本に先立つ旧本の存在が早くから指摘さ

れており、更に嘉靖壬午本をはじめとする二十四卷本系諸本よりも、二十卷本系諸本の方が、より古い形態を留めているであろう可能性についても、しばしば指摘がなされている。<sup>54</sup> 右に論じてきた、韋応物詩と三顧茅廬故事をめぐる諸版本の比較考察結果も、こうした先行研究を裏付ける上で、有力な一資料となり得るのではないだろうか。

#### まとめ

『三國志演義』の中でも出色の一場面と言える三顧茅廬故事について、『三國志』諸葛亮伝や「出師の表」といった原典に相当する資料から、『平話』・『演義』に至るまでの変遷過程を追ってきた。その中で、三顧茅廬故事そのものについては、六朝以来、唐・宋に至るまで内容上に大きな進展が見られなかったこと、一方で廬を出て劉備に仕える以前の諸葛孔明に対して、宋代以降次第に隱者としての形象が付与され、更に陶淵明像との融合が図られてきたこと、並びにこれと平行して唐代に数多く詠まれた「尋隱者不遇」詩の中から、後世の三顧茅廬故事へと繋がる様々な要素が見出せたことについて、考察を進めてきた。また、『演義』の三顧茅廬故事に見られる詩をめぐって、「尋隱者不遇」詩との関わりから、明代以降陸続と出版された『三國志演義』版本のうち、二十卷本系諸本の方が所謂「旧本」により近いであろう可能性についても、改めて指摘することができた。



なお、「尋隠者不遇」の形式を取る一連の詩において、「尋諸葛亮不遇」といった内容の詩は現時点で見出すに至っておらず、また実際にそうした詩が存在する可能性も極めて低いものと推測される。それは、「尋隠者不遇」詩が詩人の個人的経験に基づくものであり、同時代の隠者を探ねることが大原則となっているためである。しかし一方で、「尋隠者不遇」詩と『平話』や『演義』の三顧茅廬故事とを直接的に結びつける資料については、今後も引き続き調査を行う必要がある。また、三顧茅廬故事をめぐるのは、三度目の訪問に際して劉備が三日間の齋戒沐浴を行う記述や、諸葛亮が昼寝をして劉備を外で待たせる、といった記述なども見られる。これらの描写が三顧茅廬故事に取り込まれるに至った過程については、いずれ稿を改めて論ずることとしたい。

### (注)

- (1) ここでは、今日最も通行している毛宗崗批評本『三国志演義』の記述内容に従う。テキストには、『三国志演義』(作家出版社、一九五九年(一九五三年初印))を用いた。
- (2) 『三国志物語』という語は先行研究にもしばしば見ることのできる。例えば、大塚秀高「劍神の物語」(上)―関羽を中心として―(『埼玉大学紀要』第三十二巻、一九九六年)に、『三国志演義』の母体ともなった民間説話群を三国志物語の名でよぶ」とある。また、拙稿「『三国志物語』におけ

る赤壁の戦いと甘露寺説話」(『中国中世文学研究』第四十五・四十六合併号、二〇〇四年)、及び『三国志物語』の形成―蜀地方に伝わる張飛廟説話を中心に―(『中国古典小説研究』第十号、二〇〇五年)参照。

- (3) 近年、三顧茅廬故事に言及したものととしては、天行健著『正品三国』(花山文芸出版社、二〇〇六年)三六『三顧茅廬』―五箇字与七千字―に、「本来在《三国志・诸葛亮传》中、三顾茅庐的过程只有「凡三往、乃见」五个字、即或加上《隆中对策》的内容、也总共不过四百字左右、《三国志平话》中有《三顾孔明》一节、写得也比较草率浅薄。《演义》却发展成为七千多字的精彩文章、可谓独具匠心、出手不凡。」とあり、また沈伯俊・譚良嘯編著『三国演義大辞典』(中華書局、二〇〇七年)「淵源・人物・情節」三顧茅廬に、「按：《三国志・蜀书・诸葛亮传》写三顾茅庐仅一句话：「由是先主遂诣亮，凡三往，乃见。」《三国志平话》卷中《三顾孔明》一节，写得粗率浅陋。《演义》在此基础上精心创造，将「三顾」过程写得婉曲多致，遂成千古佳话。」等と見えるが、いずれも三顧茅廬故事の詳細な形成過程には触れておらず、『演義』による創作とみなしている。
- (4) 『三国志』卷三十五所収。テキストには、陳乃乾校点『三国志』(中華書局、一九六四年(一九五九年初印))を用いた。
- (5) 『文選』卷三十七所収。テキストには、『文選 附考異』(芸文印書館影印、一九六七年)を用いた。
- (6) 『弘明集』卷十一所収。テキストには、「四部叢刊」初編・子部所収『弘明集』を用いた。

(7) 他に、徐陵の「諫仁山深法師罷道書」(テキストは嚴可均校輯『全上古三代秦漢三國六朝文』(中華書局影印、一九八五年(一九五八年初印))に、「敬度高懷、未解深意、將非帷帳之策、欲集劉侯、形類臥龍、擬求葛氏。黃石兵法、寧可再逢、三顧茅廬、無由兩遇。」との例が見られる。

(8) 『全唐詩』卷六百二所収。テキストには、『全唐詩』(中華書局、一九七九年(一九六〇年初印))を用いた。

(9) 諸葛亮の茅廬の所在地をめぐっては、『三國志』卷三十五・蜀書「諸葛亮伝」裴松之注引「漢晋春秋」(テキストは注4前掲)に、「亮家于南陽之鄧縣、在襄陽城西二十里、號曰隆中。」とあり、一方、『文選』卷三十七所収「出師表」(テキストは注5前掲)に、「臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。」とあることから、古来より湖北省襄樊市とする説、河南省南陽市とする説の両者が共存してきた。しかし、松浦友久著『詩歌三國志』第二章(新潮社、一九九八年)に、「三國の魏の時代に、当の襄陽が『南陽郡』から独立して『襄陽郡』と呼ばれるようになって以後、襄陽からは急速に『南陽郡』のイメージが消えることになる。そのため、『南陽の諸葛亮』という表現は、いっそう容易に『河南南陽の諸葛亮』と受けとられるようになってしまった。……史実としては、孔明隱棲の地は、湖北の襄陽西郊にはかならない。」とあり、また天行健著『正品三國』(花山文芸出版社、二〇〇六年)三十四「諸葛亮『躬耕之地』」に、「襄陽、南陽之爭大約从元代便开始了、一直相持不下。……在前些年、国内学术界曾集会对此事展开过争论、绝大多数人都认为諸葛

亮の躬耕之地应在今湖北襄樊市的隆中、基本上已成为定论。」とあるなど、近年では湖北省襄樊市説が有力視されている。

(10) 『全唐詩』卷六百四十三所収。

(11) 『新雕注胡曾詠史詩』卷一所収。テキストには、「四部叢刊」三編・集部所収『新雕注胡曾詠史詩』を用いた。

(12) 『蘇軾詩集』卷十所収。テキストには、孔凡札点校『蘇軾詩集』(中華書局、一九八二年)を用いた。

(13) 『蘇軾詩集』卷十所収。

(14) 『黃庭堅詩集注』卷一所収。テキストには、劉尚榮点校『黃庭堅詩集注』(中華書局、二〇〇三年)を用いた。

(15) 『劍南詩稿校注』卷九所収。テキストには、錢仲聯校注『劍南詩稿校注』(上海古籍出版社、一九八五年)を用いた。

(16) 『冊府元龜』卷二百六「閔位部・禮賢」所収。テキストには、『冊府元龜』(中華書局影印、一九六〇年)を用いた。

(17) 『白孔六帖』卷九十五「龍」所収。テキストには、四庫類書叢刊『白孔六帖』(上海古籍出版社、一九九二年)を用いた。

(18) 『禪林寶訓』卷一所収。テキストには、『大正新修大藏經』第四十八卷「諸宗部五」(大正一切經刊行會、一九二八年)を用いた。

(19) 『詩品注』卷中所収。テキストには、郭紹虞主編『詩品注』(人民文学出版社、一九九八年(一九六一年初印))を用いた。

(20) 『黃庭堅詩集注』卷一所収。

(21) 『宋書』卷九十三「隱逸伝」(テキストは『宋書』(中華

書局、一九七四年)に、「陶潛字淵明、或云淵明字元亮。」とあり、昭明太子「陶淵明伝」(テキストは袁行霈撰『陶淵明集箋注』(中華書局、二〇〇三年)に、「陶淵明字元亮、或云潛字淵明。」、また『晋書』卷六十四「隱逸・陶潛伝」(テキストは『晋書』(中華書局、一九七四年)に、「陶潛字元亮。」、更に『南史』卷七十五「隱逸上・陶潛伝」(テキストは『南史』(中華書局、一九七五年)に、「陶潛字淵明、或云字深明、名元亮。」とある。

(22) 『黃庭堅詩集注』卷九所収。

(23) 『黃庭堅詩集注』卷九所収。

(24) 陶淵明と諸葛亮を結びつける発想については、李劍鋒著『元前陶淵明接受史』第四編・第一章・第一節(齊魯書社、二〇〇二年)の中で、黃庭堅の「宿旧彭沢懷陶令」詩を引用した上で、「把陶淵明看成「识时委命」的「英雄」、諸葛亮、这在陶淵明接受史上还是第一次。它开启了南宋辛弃疾、朱熹等人论陶为「卧龙诸葛」、「豪放」的先河。」と論じられており、やはり黃庭堅がその嚆矢であろうと考えられる。

(25) 『稼軒詞編年箋注』卷二所収。テキストには、鄧広銘箋注『稼軒詞編年箋注(定本)』(上海古籍出版社、二〇〇七年)を用いた。

(26) 『稼軒詞編年箋注』卷四所収。

(27) 『疊山集』卷一所収。テキストには、「四部叢刊」続編・集部所収『疊山集』を用いた。

(28) 陶淵明が廬を構えていたことに関しては、「戊申歲六月中遇火」(『陶淵明集箋注』卷三)に、「草廬寄窮巷、甘以辭

華軒。」とあり、「飲酒二十首」其五(『陶淵明集箋注』卷三)に、「結廬在人境、而無車馬喧。」とある。テキストは注21前掲。

(29) 石川忠久「尋隱者不遇」詩の生成について(小尾博士古稀記念事業会編纂『小尾博士古稀記念中国学論集』(汲古書院、一九八三年)参照。

(30) 『全唐詩』卷一百二十九所収。

(31) 『賈島集校注』附集所収。テキストには、齊文榜校注『賈島集校注』(人民文学出版社、二〇〇一年)を用いた。

(32) 以下、特に版本に関する指定がない限り、本文はすべて嘉靖壬午本『三国志通俗演義』に拠る。テキストには、『三国志通俗演義』(人民文学出版社影印、一九七五年)を用いた。

(33) 『全唐詩』卷三百所収。

(34) 『丁卯集』卷上所収。テキストには、「四部叢刊」初編・集部所収『丁卯集』を用いた。

(35) 『岑嘉州詩箋注』卷之七所収。テキストには、廖立箋注『岑嘉州詩箋注』(中華書局、二〇〇四年)を用いた。

(36) 『劍南詩稿校注』卷九所収。

(37) 『全唐詩』卷二百七十一所収。

(38) 『杜荀鶴文集』卷一所収。テキストには、宋蜀刻本唐人集叢刊・『杜荀鶴文集』(上海古籍出版社影印、一九九四年)を用いた。

(39) テキストには、古本小説集成所収『三国志平話』(上海古籍出版社影印、一九九〇年)を用い、校点本として、『三

国志平話』（上海古典文学出版社、一九五五年）を適宜参照した。

(40) 『韋応物集校注』巻五所収。テキストには、陶敏・王友勝校注『韋応物集校注』（上海古籍出版社、一九九八年）を用いた。

(41) 『全元戯曲』第六巻所収。テキストには、王季思主編『全元戯曲』（人民文学出版社、一九九九年）を用いた。

(42) 第四巻「玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、明清善本小説叢刊初編『新刻校正古本大字音釈三国志伝通俗演義』（天一出版社影印、一九八五年）を用いた。なお、『三国志演義』の版本系統については、中川論『「三国志演義」版本の研究』（汲古書院、一九九八年）を参照。

(43) 第四巻「玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、三国志演義古版叢刊続編『日本蔵夏振字刊本三国志伝』（全国図書館文献縮微複製中心影印、二〇〇五年）を用いた。

(44) 第三十七回「玄徳風雪訪孔明」所収。李卓吾評本には複数の版本が存在するが、本稿では現存する中で最も古い呉観明本に拠った。テキストには、明清善本小説叢刊続編『李卓吾評三国志』（天一出版社影印、一九九〇年）を用いた。

(45) 第四巻「劉玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、井上泰山編『三国志通俗演義史伝』（関西大学出版部影印、一九九七年）を用いた。

(46) 第七巻「劉玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、三国志演義古版叢刊五種『双峰堂批評三国志伝』（中華全国図書館文献縮微複製中心影印、一九九四年）を用いた。

(47) 第七巻「劉玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、古本小説叢刊第二十三輯『三国史伝評林』（中華書局影印、一九九一年）を用いた。

(48) 第七巻「劉玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、古本小説叢刊第二十二輯『三国志伝』（中華書局影印、一九九一年）を用いた。

(49) 第七巻「劉玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、明清善本小説叢刊初編『重刻京本通俗演義按鑑三国志演義』（天一出版社影印、一九八五年）を用いた。

(50) 第七巻「玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、三国志演義古版叢刊五種『番山堂本三国志伝』（中華全国図書館文献縮微複製中心影印、一九九四年）を用いた。

(51) 第七巻「劉玄徳風雪訪孔明」所収。テキストには、古本小説叢刊第三十五輯『鼎峙三国志伝』（中華書局影印、一九九一年）を用いた。

(52) 二十巻本の中には、湯賓尹本、朱鼎臣本、誠徳堂本など、当該の詩そのものを収録していない版本も幾つか存在する。

(53) 『三国志演義』の「旧本」については、上田望『「三国演義」版本試論―通俗小説の流伝に関する一考察―』（『東洋文化』第七十一号、一九九〇年）、金文京『「三国志演義の世界」第七章「三国志演義」の出版戦争』（東方書店、一九九三年）に詳しい。

(54) 柳存仁「羅貫中講史小説之真偽性質」（劉世徳編『中国古代小説研究―台湾香港論文選輯』（上海古籍出版社、一九八三年）所収）に、「竊以爲此類《三国志傳》之刻本、今日

所得見者雖爲萬曆、甚至天啓年間所刊刻、時間固遠在嘉靖壬午本《三國志通俗演義》之後、然其所根據之本（不論其祖本爲一種或多種）、固有可能在嘉靖壬午以前。易言之、則目前爲吾人所見之數種《三國志傳》、其所保存《三國》小說之舊有形象、實當更在嘉靖本以前無疑。」とあり、更に柳氏の説を受けて、陳翔華「明清以來的三國說唱文學——兼說它与歷史小說『三國志演義』的關係」（河南省社會科學院文學研究所編選『三國演義』論文集」（中州古籍出版社、一九八五年）所収）に、「現据別本《三國志傳》正文分段与文字的异同、以及回目的演变情形、我认为柳说可信、《三國志傳》当是今存诸本中接近于罗贯中原作的一种本子。」との指摘が見られる。

[附記]本稿は、二〇〇九年十月三十一日、広島大学で開催された中国中世文学会平成二十一年度大会における口頭発表の内容を加筆、修正したものである。その際、司会の大角哲也先生をはじめ多くの先生方より貴重な御意見を賜ったこと、並びに後日、武井満幹先生より陶淵明の受容史に関して大変貴重な示唆を賜ったこと、ここに記して謝意を表したい。また本稿は、文部科学省科学研究費補助金の交付を受けた若手研究 B（課題番号 21720119）による研究成果の一部である。